

徳富蘆花 『富士』 小説論

辻 橋 三 郎

(一)

『富士』第一巻は、大正一四年五月一日、福永書店から発行された。そして、出版後、わずか二〇日のちの、五月三〇日には、早くも、三〇版を重ねていた。しかし、文壇が、それに冷淡であったことは、多くの蘆花研究者の指摘するところである。沖野岩三郎記すところの、蘆花全集付録の「解題」によると、専門作家の批評は、同年六月一日から三日間にわたる、都新聞紙上の加藤武雄文と、同月一五日から一九日までの、東京日々新聞紙上の沖野自身の一文との二つだけのようなものである（もっとも、蘆花ファン、キリスト教関係者の賛辞の数少なくないことは、いうまでもない）。この『富士』が、評者の対象にのぼるようになったのは、戦後、没後三〇年にあたる、昭和三二年前後の、再評価気運勃興のちであった。このころ、四冊におよぶ蘆花特集号が出た。すなわち、昭和三十一年の『文学』（岩波書店）八月号、三十二年一〇月の『明治大正文学研究』（東京堂）二三号、同年の『日本文学』（未来社）の一二月号、三三年四月の『キリスト教社会問題研究』（同志社大学）創刊号などである。

これらは、単に没後三〇年を記念するのみならず、蘆花文学が、文学の根原的エネルギー（＝エネルギーの土着性）

を包含するものとして、近代日本文学史再編成のための、発掘作業の幾つかのみのりであった。そのうち、『文学』と、『明治大正文学研究』とが、『富士』をタイトルとした論文を掲載しているのである（『文学』―木村毅「『富士』の再評価」、『明治大正文学研究』―鍵田研一「『新春』と『富士』について」）。それは、編集当事者が、『富士』を代表作の一つとして考えていたことを意味する。さらに、三七年二月に至って、『国文学』（学燈社）の「近代文学における自伝性」と題する特集号でも、佐藤勝氏によって、『思出の記』とならんで『富士』がとりあげられているのである。以下、これら三氏の『富士』論の要旨を、列挙してみよう。

木村毅氏―主として、利用価値の点からの再評価である。すなわち、(1) 蘆花文学解説の鍵として、(2) 「民友社を中心とする文壇史、ジャーナリズム史の片面」―近代文学史解明の資料として、(3) 翻訳史の一端を示すものとして、(4) 日清、日露戦争とその前後の、すぐれた同時代史として、などから軽視できない作品であるという評価である。

鍵田研一氏―(1) 『新春』の「肉づけ」である。(2) 「一個厖然たる末梢鎖事の塵埃の山」のやうなもの」という前田河廣一郎の評言は、まことに適評である。(3) 小説ではなく、「ある程度まで、小説的な、あるいは小説に似た、放奔豪華な告白録」である。

佐藤勝氏―(1) 「一個厖然たる末梢鎖事の塵埃の山」のやうな、「醜怪な作品」である。(2) 「『思出の記』の作者がその生涯をかけた文学的実践のまぎれもない一帰結」である。

以上三文のうち、二文が、いづれも、「一個厖然たる末梢鎖事の塵埃の山」という、前田河の評語を引用していることは、前田河の評語の的確さを証明するものといえよう。ただ一回の名前だけの登場人物、ストーリーの展開に何の關係もない無数のデテールズと人物群などなどの、何と多いことであろう。蘆花によって、「小説」と銘うたれつつ、これほど、いわゆる小説の約束を無視した作品は、近代文学史上、稀有といっているのではないかと思う。

しかも、三氏が特筆し、猪野謙二氏もまた、「下手で、小説としてはだめ」だが、「やっぱり面白い」としている理⁽⁸⁾

由はどこにあるのであろうか。資料的興味、精神病理学的対象としての興味などにとどまらないことは—それ以上のものがあるにちがいないことは、鏑田、佐藤の二氏の指摘したところでもあった。しかし、ばかりでかい上、非小説的であるということは、作品分析の突破口を、どこにおいていいか、迷わせる。そこで、わたしは、蘆花自身の、『富士』製作の意図を示す言葉に、そのいとぐちを求めてみたいと思う。

「夕食後ストーブの前で話す。

『富士』の他の告白懺悔との差違は何？

Aは曰ふ、他は横断面、あなたのは縦断面。

余曰く、皆のは個人で、背景に歴史なく、民族なく、血族なく、而して、男女相對なし。

余又曰く、『富士』は他の『日本から日本へ』だ。皆がだらけて居ると思ふだらう。面倒臭がるだらう。批判が足らず、燃焼が足らぬと謂ふだらう。

然し其当時其當時を如実に再現する一番忠実なやり方だ。面白く書かう、きびきび書かうとすれば、嘘になる。嘘は薄弱だ。

あぶりだした。Composite Photograph だ。

忠実に点線を辿らう。

自然が成す。」(日記 大正一四、一、一三)⁽⁴⁾

これを敷衍要約すると、次のようにならうかと思う。

- (1) 『富士』は、歴史、民族、血族を背景とし、「男女相對」の流動展開を主題とした、「告白懺悔」である。
- (2) 『日本から日本へ』を世界編とすると、『富士』は、その夫婦編である。
- (3) 事実の再現即芸術である。

ところが沖野の筆による全集付録「解題」⁽⁵⁾には、蘆花みずから筆をとった広告文が記されており、そのなかに次のような表現があるのである。

「小説『富士』いと小き夫婦の日常生活の記録——然し神と人、歴史と生命、霊と肉、東洋と西洋、而して畢竟男と女、其の對抗、血闘、苦闘、抱擁、融和は端的に其処に現はれる。斯の新旧雜揉、東西混淆、古事記に所謂『くらげなす、ただよへる』どろどろの混沌の中から一男、一女、一夫婦を造り上げられる創造の過程を見んとならば、小説『富士』はまさにそれである。縮写されたる新日本の解脱更生史を、其処に読む事も出来得よう。」

この氣負った文章は、調子にのると、ともすれば、浅く軽く走り、その結果、誇張にすぎる彼の筆癖を、まざまざと示してはいるものの、無視してしまつていいものとは思われない。とくに「神と人、歴史と生命、霊と肉、東洋と西洋」という問題の立て方は無視できない。

そこで前掲「日記」の蘆花言を、広告文の問題意識をもつて補いつつ、『富士』の実態に迫つてみたいと思う。

(二)

△背景としての歴史、民族▽

「熊次駒子が結婚の前々月、永らく日本に亡命して居た朝鮮の金玉均が上海におびき出され、韓廷の刺客洪鐘宇にピストルで殺された。それは日本の面に冷水をぶつかけたやうなものである。韓廷が其刺客を重賞したり、清国執権の李鴻章が韓廷に祝電をうつたりした事は、日本の怒火を燃え立たさずには措かなかつた。(中略) いざとなれば喧嘩そちのけ、一斉に外に向ふ日本氣質を支那は知らなかつた。年来、年は一年と昂まつて来た日本国民の自主的氣勢が文弱と罵らるゝ政府の腰を強めて居る事を知らなかつた。日本陸海軍の消防隊が手ぐすねひいて火事待ちかねの静まりかへりを見得なかつた。(中略) 朝鮮が真剣に日本の愛を、支那が日本の力を試す時が来たのである。」(『富士』第一

卷⁽⁶⁾

「思ひがけない三国の干渉に、勿論日本は不意をうたれて驚いた。怒った。ぢれた。然し到頭聴かねばならなかった。二年に渉る戦争の後、欧羅巴の強大な三国の新手を相手に合戦は全くの無謀である。英米の友邦も我慢をすめ。到頭五月十四日に遼東還附の詔勅が出た。戦勝の凱歌が、ぐつと咽喉につかへて了ふた。氣も狂ひさうな悲憤、やがて精神的敗北の減入り、日は輝やく日本が、其まゝうと白昼の闇になつた。氷川の海舟翁は苦勞人である。三国が何だ『三国に踏跨がれよ富士の山』と減入る日本に活を入れた。」(第一卷、以下『富士』に関する限り、巻数のみとする)。

全集にして三冊に及ぶ、四卷一四二三頁を通読すると、これらと類似した表現に、何度、つき当るかわからない。このような叙述を背景としての歴史といっているのなら、蘆花の歴史意識を疑わないわけにはいかない。これらには、天皇制国家権力の論理と、権力の唱導に追隨する、安易なおめでたさとがあるだけである。換言すれば、前田河広一郎が指摘するように、新聞材料的戦争と政治とについての粗大な叙述と、それに伴う、単純な愛国的喜怒哀楽があるだけである。

したがって前掲した広告文にあるような、「歴史と生命」という課題に答えた認識と論理など、ありはしないのである。もしも、

「朝鮮の中に、日清戦争の足どりがちりちり寄つて来つつある間に、熊次もすでに自分の戦を戦ふて居た(兄とのそれ―辻橋注)。五月五日、男の子の節句の結婚は無意味でなかつた。」(第一卷⁽⁹⁾)

「国と国と争ふ時、家の中にも戦争は已まぬ。今年の始めには、弟が兄に叛いて独立の旗を挙げた。」(第三卷⁽¹⁰⁾)

「兄に楯つく弟は、露西亞を撃つ日本を是とせぬ訳には往かぬ。」(第四卷⁽¹¹⁾) などの偶然的吻合をもって、「歴史と生命」の有機性の発見指摘とでも思っているとしたら、大変な思いあがり、自己中心の幼稚な、浅薄な思考といふべきで

あろう。

また、「東洋と西洋」という問題意識にしても、

「(三) 三国干渉を憤って——辻橋注」即位の初、元勲ビスマルクを追払つて、内外に好事の腕をふるひ始めた独帝維廉二世は、夙に東洋の醒覺を感知して、ただならず恐れた。器用な彼は『黄禍』と題する漫画を描いた。」(第一卷)⁽⁴⁾

といったものを指示しているとしたら、これまた、素朴極まるそれというべきであらう。そして、事実、全巻を通じて、こういった意味の表現しが、「東洋と西洋」の課題に該当する個所はないのである。漱石の「それから」「現代日本の開化」などにうかがわれる、あの秀抜な「東洋と西洋」についての認識を思い浮べる時、蘆花のその貧弱さを、一層確認できると思う。

△背景としての民族△という表現における、民族という言葉の意味も、前掲した引用文から推測すると、民族意識のことのように思われる。その民族意識というものも、対外敵愾心とか、民族のエゴイズムとかを内容としたものである。つまり『富士』において蘆花のいう、△背景としての歴史、民族△という場合の、歴史、民族は、雑駁な新聞材料的政治、戦争記事と、幼稚極端なナショナルな関心をさしているように思われるのである。

付記しておくが、ここに、私が指摘した蘆花の歴史意識は『富士』に読みとられる、彼のいわゆる歴史意識なのであって、彼の史眼一般についてではない。無名時代からの多くの伝記、晩年の『竹崎順子』を貫流規定している彼の史眼には、凡庸ならざるものがうかがわれていた。そのようなすぐれた史眼の持主にしては、戦時の国民感情一般を露呈したものではありません。それをそのまま、「歴史」と呼んでいる彼の概念規定の荒っぽさには、少なからぬ途惑いを覚えずにはおられない。これをすぐれた明治人の歴史感覚として認容することは、筆者には到底できない。

要するに、△背景としての歴史、民族△という表現における、歴史、民族の意識は、『富士』の場合、背景としても、文学作品におけるそれとしては、まことに、洗練されざる無味蕪雑なものであった。

(三)

△背景としての血族▽

彼の作品中『富士』を除くと自伝的作品としては『思出の記』、『黒い眼と茶色の目』の二つがあげられる。したがって、この三作品には、彼の一族がしばしば登場する。なかでも、『富士』は、三作品のうちではもちろん、蘆花文学中、最大の長篇であることから、彼の一族のほとんどすべてが、一度は名前だけでも、登場させられているといっている。前田河が表現し、鏑田、佐藤両氏が引用している「塵埃の山」という形容の半分は、これらの人物群の氾濫へのそれであるとみてよからう。

さて、この三作品、とくに『富士』を、丁寧に読み進もうとすれば、どうしても、徳富家、矢島家を中心とした一族の系図を、作製せずには進捗しない。それを作りあげて、改めて、その系図を見通してみると、蘆花と推測される主人公をめぐるストーリーの展開に、一人一人が、何らかの意味で、必要な役割を果していることを認識させられるのである。それもその筈で、三作品のみならず、蘆花文学のすべてが、蘆花と彼の家との対決を主題としているのであってみれば、なくもがなの一族中の片々たる人物と見えても、作品展開に欠くべからざる存在であったのは当然であった。

しかも、家との対決という主題の中軸をなすものが、蘆花と兄蘇峯との対決である。それは、蘆花の、生涯をかけた課題であった。荒正人氏は、負け犬蘆花と勝ち犬蘇峯という図式で、これをとらえた。⁽³⁾ 蘆花をとりまく、一族のあらゆる対立は、この基本的対立に、すべて、収斂されるというのである。

このような、負け犬勝ち犬関係をバックボーンとした『富士』に先だって書かれた『新春』(大正七年)は、蘆花の独立宣言、新生宣言であった。もっと具体的にいえば、劣等感からの解放、家意識からの自由の獲得についての、内外への宣言文であった。それには、

「疵松——これは私の庭には恰好のものだ。私が此松で、此松が私なのだ。私は五才からの疵物である。」（『新春』）
「私の庭の中心木たる疵物の松——これは私の life の象徴である。」（『新春』）

「私の前半生は母と兄に対する片恋の生涯でありました。」（『新春』）

などという、彼の劣等感の原点、その生地の原型を示す表現が、数少なくない。その原点、原型の、詳細な解析が、未完の大作『富士』なのであった。荒論文も、「負け犬勝ち犬」理論の展開に、『富士』からの引用文を数多く使用している。『富士』は、独立までの道、新生までの道の、決して平坦でなかったことを、縷々と述べてあきない。熊次（蘆花）は、何回となく、兄に即き、兄から離れた。父、母、その他、一族の誰彼との親和、離叛が、それに平行してか、あるいは、随伴的に、継起した。

先ず、第一巻の開巻早々、「一切父兄任せ、否兄任せ」の、熊次（蘆花）の縁談の進行が物語られ、やがて、式場における、異例な、惨めな熊次の位置の描写がある。この場面は、『富士』全体を暗示する、象徴的シーンといえよう。以下、熊次の兄への劣等感のありようの幾つかと、引用してみよう。

「東京に来るとやがて、唯一度ある事の異議を申立てた時、『言ふ事を聴く約束で来たらう』と、屹度兄に言はれて以来、熊次は苟にも諍ふ事をやめた。」（二巻）

「それに、送ってもらへばもう用はない、『社も忙しからう、もう帰れ』とは、随分だ。忿々して、熊次は荒布屋を出た。父に対する反感が、烈しくこみ上げる。」（第一巻）

「嗚呼吾は久しき奴隷にてありしよ。」

家兄の奴隷なりき。

（中略）

今より後、吾また決して奴隷たらじ。

何人にもあれ、何ものにもまれ、わが自由を礙ぐる

ものあらば、即我敵なり。」(一卷⁽⁴⁾)

「兄は兄、弟は弟である。弟は兄に沢山受けて居る。然し兄に弟は随分借して居る。つもりつもった古証文の深い不快の鬱憤は機ある毎に鋒鋲を露はさず居なかつた。」(二卷⁽⁵⁾)

アトランダムに抽出したこれらの引用文からだけでも、私たちは、蘆花の、兄への劣等感と、兄への挑戦の姿勢を読みとり得る。このような兄とその周辺との対決、一族との関係が、微に入り、細に入り、その極まるところを知らないようである。それは、もう、彼のいう背景などといえるものでなく、主題そのものである。そして、一族一家を描いて、『富士』ほど、一族の末端に至るまで、姐上にのぼせられている作品はない。そこに『富士』独特の構造があるといひ得るのではないかと思う。

(四)

△男女相対の流動展開の告白懺悔▽

男女相対が、熊次と駒子、すなわち、蘆花と愛子とのそれであることはいうまでもない。そして、これが、『富士』の主題であることは、蘆花みずからのいうところであつた。

さて、彼の兄に対する劣等感は、彼のあらゆる対人関係を規定した。妻の場合も、その例にもれなかつたのはいうまでもない。

「彼は自分が嘗めただけをことごとく駒子に嘗めさせずには措かなかつた。自分の妻が自分より幸福である事を彼は容せなかつた。熊次は自分が思ひ知つただけを、われ知らず駒子に思ひ知らせた。熊次の過去を知らぬ駒子に、それは全く不意打であつた。駒子は動揺した。来る日も、明くる日も、熊次の不機嫌は唯募るばかりであつた。駒子とても負ひ

きれなかつた。」(一卷)⁽⁸¹⁾

彼は、妻を、自分と同一次元、あるいは、それ以下に位置させたかつた。ところが、官立の女子高等師範出身であり、一家の愛情を一身に集めて育つた妻もまた、蘆花よりも優越者であつた。彼の妻への乱暴は、そこに原因した。「すべて初が大切」で、「一度やり損」すると、「すべてを咀」う蘆花は(一卷)⁽⁸²⁾、乱暴に次ぐに乱暴をもつてした。妻愛子には理解を絶した蘆花の癪癪は、数えあげていけばきりが無い。しかも、妻への乱暴は、すべて兄に対する劣等感の代償作用であつた。その妻は、実家に引き戻そうとする兄にそむいて、彼と「情死します」(一卷)⁽⁸³⁾とまでいって、彼のあとを追つてきた。彼とても、嫌いな妻の兄に、意を屈して謝罪する程で、妻なしではおられなかつたのだ。

「『余は悪魔なり。天の使よ願みよ、駒子の夫は悪魔なり。然も駒子は無罪の天使なるを』さう日記に断つて、熊次は日に日に悪魔を募らせた。」(一卷)⁽⁸⁴⁾

「而して泣き声の祈が、はじめて聞いた駒子の祈声が近く耳元の闇に響いた。『神様、何卒私の良人を基督にならしめ玉へ』」(三卷)⁽⁸⁵⁾

とあるように、熊次(蘆花)にとって駒子(愛子)は、また、駒子にとって熊次は、時に、神ですらあつた。もちろん、蘆花は、明治一八年、一八才(数え年)で受洗しており、一時は、伝道を志したことすらあつた。妻も、三九年、安中教会で、柏木義円牧師(『富士』では、終牧師)から洗礼を受けた。しかも、

「耶穌の信仰に入ると共に、真面目に闘ふて余程自己を征服し、自尊を取り返へすとともに、外に対する元氣も出たのであつた。」(一卷)⁽⁸⁶⁾

「然し万有は神の聖書だ。自分は自然を通じて神を見たい。」(二卷)⁽⁸⁷⁾

「主宰の神をば信ずれど、基督は猶理想の標的なれど、余は何時の頃よりか基督教正統派の信仰を失ひぬ。(下略)」(三卷)⁽⁸⁸⁾

とあるように、その神と、それへの信仰とは、動搖に動搖を重ねていた。その信仰が、紋切型の教義通りのものでなかっただけに、それは必然の苦惱であった。したがって、蘆花夫婦が、お互に、お互の中に神を見たのも、その一つであった。冒頭に引用した広告文にある、「神と人」という問題意識は、看板に偽りのないものであった。彼ら夫婦の信仰は、「神と人」という問題意識を、夫婦の相剋のなかで、実感していたことを、『富士』は、忠実に物語っている。彼らの信仰の特異性にそこにあった。それが、やがて、夫婦を、第二のアダム、イブと、拡大上昇させていった要因であった。かくて(1)男の、兄への劣等感の代償作用として妻への乱暴、(2)しかも、二人の対審と親和とが、「神と人」という問題へのアプローチであったというような、男女相対の流動展開が、『富士』全四巻の、主要テーマの一つであったのである。

さて、次に、『富士』を、蘆花が、〈告白懺悔〉と、みずから、規定していることは、そのまま、認めて差支えないものであろうということである。告白も懺悔も、キリスト教用語であることはいうまでもない。したがって、告白は、信仰告白の省略であると思われる。すなわち、告白は、罪を離れる決断の表明であり、同時に、主イエス・キリストに対する信頼と服従の決断である。懺悔は、神の前に、自己の罪を明白に表明し、赦罪を求める行為である。もっとも、『富士』を、この定義と照応させてみて、びったり、適合する筈がない。いかに、評家が非小説的といっても、蘆花自身は、小説と冠しているし、ものなのであってみれば当然であらう。いずれにせよ、蘆花自身には、まぎれもない文学的実践であり、そうである限り、蘆花の(あるいは夫婦の)何故ならば、共著とあるから)自己主張であるということができる。自己主張が、宗教的態度に背反するものであることは、贅言を要しない。しかし、評者には非小説に思われた『富士』が、客観的に自己主張と異質の要素を含んでいるのは当然であった。その一つが宗教的要素なのであるが、だからといって蘆花がいうように、『富士』全四巻を、〈告白懺悔〉として一括して規定できるものではなかった。例えば第一巻第二章「どん底へ(其一)」の中の、川崎における登楼の叙述、第四巻第三章「医前は神前」の中での、

旧い性病を発見された時の叙述などが、それであり、これらは、蘆花の暗側面を提示したものである。自然主義文学者の場合、そうした恥部露出は、直接的間接的とを問わず、自己肯定につながっていた。ところが、蘆花の場合には、それらに肯定的意味がになわされてはいなかったのである。蘆花の内部においては、神の前にはいえないまでも、告白懺悔の意志の表明であった。ただ、それらは全般的な自己主張的文脈のなかの、すなわち、文学的実践の限界の中におけるそれであったことが見逃されてはならない。

つまり、『富士』のなかにおける自己否定的要素の存在は否み得ない事実といい得るとしても、『富士』全巻を、△告白懺悔△という宗教文学的に規定することは、無理ではないかというのが、正直な評価であろうと思う。

(五)

△『新春』夫婦編△

「私共がパレスチナへなど参ったのは何の為めでせうか、理由は斯様です——私共は耶蘇基督を復活させるためでありました。人間の現状に就てよくよく沈思熟考を重ねた結果、私共——私と私の妻——は、基督の再現にあらずんば全世界を覚醒さす事は出来ない、という結論に到達しました。私共は『死せる耶蘇』や、『磔刑の基督』はもう沢山です。十字架が多過ぎます。否、『イエス・キリスト』が今一度来ねば、駄目です。霊の基督でなく、肉の基督が来ねばなりません。」これは、『日本から日本へ』第三巻に挿入されている、蘆花夫婦の、トルストイ未亡人への手紙の一節であるが、同書簡には、極めて重要なことが凝縮されている。それらを列挙してみると次の四項目になる。

(1)『日本から日本へ』の旅は、パレスチナに行くためのものであった。(2)パレスチナに行ったのは、キリストを復活させるためであった。(3)復活のキリストは、私たち夫婦である(第二のアダム、つまり復活のキリストは、妻——第二のイブを伴っているというのである——辻橋注)。(4)復活したキリストは、肉のキリストである。

『日本から日本へ』は、このうち、(1)(2)に重点がおかれており、(3)(4)は、比較的簡単に、彼の見解が、結論だけ投げ出されている感が深い。そして、この『富士』は、その(3)(4)を細叙しているといえると思うのである。

すなわち、復活のキリスト夫妻、肉のキリスト夫妻の、形成されていく過程の記録が、『富士』なのである。前掲広告文にうたわれている「霊と肉」という課題の内容は、霊のキリストではない、肉のキリスト再臨のための苦闘を意味させていたのであらうと思われる。

要するに、晩年の『新春』『日本から日本へ』『富士』は、蘆花の「復活のキリスト論」であった。そして『新春』は、その総論であり、『日本から日本へ』と『富士』とは、その世界編、夫婦編として、夫々その各論をなすものであった。

(六)

△事実の再現即芸術▽

「小説『富士』は私共のかかる結婚生活史の当初の十二年間の記録で、今度の第四巻に書いて居りますやうに、明治三十八年日露戦争終結と共に心的革命を来し、過去一切を葬り去る心で、明治二十七年正月結婚の年から書きはじめて居りました日記をはじめ、明治二十一年から書きためて居ました随筆、感想、小品文、紀行文、手紙の類、第一此巻にあります桜島遊記に至るまで、一切焼却してしまいました。夫故十九年後の大正十三年にいざ富士を書くとなつて、差しより参考とすべき日誌の一片、ノートの類の一葉もあらう筈なく、空から記憶を蘇らす為めの努力は、とても想像の及ぶところでありませんでした。『仕事の為に』と題してザラザラした分厚な雑記帳二冊にペン或は鉛筆で彼を中心に年代表、縦に横に親族の關係、知友及其家族、姓名、年月日、小伝とも見うる、逸事、片言、隻語、苟も耳にのこるもの、眼にのこるもの、家の図なども記入され。親族知友の手紙、詩歌、写真、絵はがき、郵便貯金通帳の出入の金額、台所

の出納帳、著書の日附、水筒、写真帳、あるかぎりのものを二十の引出しに年代により分類してきちんと納めてありま
したり、大にして世界の趨勢、内閣の更迭から小は動植物の移動まで、周到なる注意をもつてとりあつかはれて居りま
す。」(第四卷「小説富士を出すについて」)⁽⁸³⁾

この長い引用文は、『富士』執筆当時の蘆花の態度を物語っている。「生活即芸術」論の立場から、彼は引用文の中
に列挙してあるような資料を蒐集したのであった。彼は、文学のリアリティとは生活事実の集積によって獲得されるも
のと思つていたのである。したがって、形象化の際の、事実の取捨選択は、極力排撃されねばならなかった。そこから、
前田河広一郎のいう、「塵埃の山」が結果的に招来されたのであった。これについての、前田河の解説は、まことに肯
綮にあたつたものといえると思う。すなわち、前田河は、『富士』作製のために集められた生活事實は、小説を構成す
るためではなく、人生という大きな法廷で、兄から、世間から、いかに劣等感を体認させられたかという、裁判記録的
なものの公表のためであつたといふのである。⁽⁸⁴⁾換言すれば、負け犬蘆花についての、巨視的、微視的実況報告のため
であつたのである。全体的構図の中で負け犬の真実がここにある、という意味で、まさに、蘆花自身の人生にと
つては、リアリティそのものであつたのだ。『富士』が、蘆花にとっては、小説＝芸術であり、「塵埃の山」として読
みとつた人々には、非小説であつた所以はそこにあつた。

要するに、蘆花のいう、事実の再現即芸術といふことは、文学論的用語に換言すれば、主観的リアリティ即芸術のリ
アリティといふことであつた。この見解は、一見、岩野泡鳴の一元描写論に極めて類似しているように思われる。しか
も、泡鳴の場合、それは次のような信念と態度とに基づいていた。

(1)「人生は人間自身の主観に這入つてこそ、そして這入つただけが、真の人生である。」⁽⁸⁵⁾

(2)「僕等は人生観に於いても描写態度に於いても浅薄な寛大よりも深刻な偏狭を取るべきだと思ふ。」⁽⁸⁶⁾

この泡鳴の信念と態度を『富士』における蘆花のそれといつても、怪しまない人も多いと思う。ただ、泡鳴の表現に

従って修正を施してみれば、(1)はそのままではよいとして、(2)の場合、「浅薄な寛大」と「深刻な偏狭」との区別はなく、彼と何らかの意味で関係のあるものは、すべて「深刻な偏狭」であったことになる。この大正七年一〇月の、泡鳴の所論（「現代将来の小説的発想を一新すべき僕の描写論」『新潮』）が起爆剤となって、一連の「一元描写論争」がとり交され、それは、大正九年五月の泡鳴の死によって終止符が打たれる程、長期間にわたったものであつてみれば、いかに文壇外に佇立していたとしても、蘆花が何らかの影響を受けなかったとは断定し難い。今の筆者にはそれについての実証の術をもたぬが、『富士』にうかがわれる、事実の再現即芸術という方法は、泡鳴の見解の暗々裡の累及によるものがあつたように思われてならない。そのような事実の記録が、当時の読者に面白く読了された秘密は、ひたむきに羅列堆積して倦まなかつた異常なエネルギーにあつたのではなからうか。そして、その強靱執拗なエネルギーのおもむくままに、書き進め書き継いでいったところに、『富士』の方法のユニークさの一つがあつたといえるのではないかと思う。

(七)

畢竟、『富士』は、多くの識者から、非小説と評された程、非文学的夾雑物にみちていた。劣等感からの解放、夫婦による自我（『夫婦我』）の確立という大目的に副った膨大な事実群が、軽重、大小を問わず、精力的に叙述描写されているのである。それらの事実群は、蘆花の生にとって、のびきならない必然であつたと同様、作品『富士』にとつても、必須の因子であつた。『富士』執筆時の彼にとつて、生のリアリティは、そのまま、文学のリアリティであつたからである。「塵埃の山」は、一般的文学概念からは非小説的要因とみられたが、『富士』にとつては、かけがえのない事実の山―生の痕跡―であつた。ここに、作品『富士』の独自の方法があつた。

蘆花は、日記の中で『富士』において、△歴史、民族、血族を背景とした「男女相對」の流動展開を主題とした告白

懺悔Vを意図すると書いた。⁸⁰しかし、△血族V―兄とその周辺との対決、負け犬勝ち犬関係―は、決して、背景にとどまるものではなかった。それは、△男女相對V―夫妻の異常な愛情関係―に匹敵する、というより、それにまさる主題であった。すなわち、△血族Vと△男女相對Vとは、相表裏して主題をなすものであった。それは、まさに、巨大な家を、主題としたものということができる。しかも、『富士』ほど、家の微細な毛細血管と思われるもので、腑分けした作品はなかった。ここに作品『富士』の構造の独自性があった。

最後に、同時代の作家、島崎藤村との比較で、この小論を終ろうと思う。藤村が、独歩とともに、蘆花にライバル意識をかきたてた作家であることは、『富士』の中で、二箇所も彼にふれているところがあることからも、察せられる。⁸¹

蘆花の『黒い眼と茶色の目』（大3）『新春』（大7）『富士』（大14―昭3）は、藤村の『桜の実の熟する時』（大3―7）『新生』（大7）『夜明け前』（昭4―10）と対応するように思われる。

二人はともに、家と自己との問題を、終生の文学的課題とし、特に、前記三作品に於いては、類似した題材を取扱っていた。しかし、問題の処理の仕方、文学的方法において、大きな懸隔があった。結論のいいえ、藤村の場合は、旧い家の圧力に受苦煩悶しつつ、自己を確立したが、終局的には、家を自己の内部に吸収し、自己にふさわしい新しい家造りにつき進んだ。蘆花にとって、兄に代表される家は、彼の自我を圧殺し、彼を劣等感差別意識に陥れ沈める以外の何物でもなく、妥協の余地は全くなかった。彼は、終始、家と戦い続けた。この問題への姿勢の相違は『夜明け前』と『富士』との文学的方法をも、対照的にした。『夜明け前』において、家を容認した藤村は、自己の精神的原型を、父の中に発見しようとしたのであった。家を否定している蘆花には、自己の精神的原型は、自己の過去を精査、再発掘することによる以外、方法はなかった。『富士』において、「塵埃の山」といわれるような結婚後の過去のすべてが、洗いざらい網羅されたのは、そこに原因していた。かくて、「塵埃の山」的方法は、『富士』における蘆花ののびきならぬ必然の方法であったことを、繰返し強調してこの稿を終りたい。

(注)

- (1) 全集解題⁽¹⁰⁾。(2) 『蘆花の芸術』(興風館) 五七六頁。(3) 『座談会 明治文学史』(岩波書店) 二九六頁。(4) 前田河広一郎『蘆花伝』(岩波書店) 六六〇、六六一頁。(5) 全集解題⁽¹⁰⁾。(6) 全集一六卷 一一四、一一五頁。(7) 全集一六卷三四六、三四七頁。(8) 『蘆花の芸術』三九二頁。(9) 全集一六卷 一二五頁。⁽¹⁰⁾ 全集一八卷 一五七頁。⁽¹¹⁾ 全集一八卷 一七六頁。⁽¹²⁾ 全集一六卷 三四七頁。⁽¹³⁾ 「負け犬」『近代文学』昭和21・11 12合併号。⁽¹⁴⁾ 全集一〇卷 四六一頁。⁽¹⁵⁾ 全集一〇卷 四六三頁。⁽¹⁶⁾ 全集一〇卷 二八〇頁。⁽¹⁷⁾ 全集一六卷 六一頁。⁽¹⁸⁾ 全集一六卷 三八一頁。⁽¹⁹⁾ 全集一六卷 四六五頁。⁽²⁰⁾ 全集一七卷 一八二頁。⁽²¹⁾ 全集一六卷 一七四頁。⁽²²⁾ 全集一六卷 一七四頁。⁽²³⁾ 全集一六卷 二六〇頁。⁽²⁴⁾ 全集一六卷 一七一頁。⁽²⁵⁾ 全集一八卷 三六七頁。⁽²⁶⁾ 全集一六卷 六二頁。⁽²⁷⁾ 全集一七卷 一七六頁。⁽²⁸⁾ 全集一八卷 一八頁。⁽²⁹⁾ 『口語旧約聖書略解』(日本基督教団出版部) 九二頁。⁽³⁰⁾ 『キリスト教大事典』(教文館) 五六五頁。⁽³¹⁾ 『キリスト教大事典』四五四頁。⁽³²⁾ 全集一四卷 三八頁。⁽³³⁾ 全集一八卷四五六頁。⁽³⁴⁾ 徳富猪一郎宛書簡、大正2・6・21。前田河広一郎『蘆花の芸術』四四三頁による。⁽³⁵⁾ 『蘆花の芸術』五七九—五八二頁。⁽³⁶⁾ 岩野泡鳴「現代将来の小説的発想を一新すべき僕の描写論」『近代文学評論大系5 大正期II』(角川書店) 八八頁。(初出『新潮』大正7・10) ⁽³⁷⁾ ⁽³⁸⁾ と同書九二、九三頁。⁽³⁹⁾ 『富士』三卷、全集一七卷 三七六—三八〇頁、四二四—四二九頁。⁽⁴⁰⁾ 前田河一郎『蘆花伝』(岩波書店) 六六〇、六六一頁。

Saburo Tsujihashi

On Tokutomi Roka's *Fuji*

Resume

In this autobiographical novel, Tokutomi Roka intended to release himself from the inferiority complex toward his brother, Sohō, and to record the process of his own self-discovery. He employed the device of including massive facts without proper selection. This device is rather unique, and well serves his purpose.

Hence, this four volume autobiographical novel, *Fuji*, may well be claimed as his masterpiece.